文章・文体

糸井通浩

はじめに

言語研究の対象となる、言語のそれぞれの単位体には、知覚的な面と観念的な面とがある。文章・談話という単位体を対象とする研究でも例外ではない。そこで、前回の展望（佐久間まゆみ担当）を参照しつつ、「文章・談話」の研究を、大きく、その知覚（パロール）的面の研究と観念（ラング）的面の研究とに大別して整理する。

時枝誠記が切り開いた、「文章」という単位体を研究対象とする語学的研究が、この二年間においても、いよいよ花開いてきたという感を抱いた。それに伴い、ますます、文の文法論の領域や言語行動―言語生活論などとの境域が截然とは区分しにくくなってきた。まして、国語学―言語学の立場からの研究にとどまらず、社会学、認知科学、心理学などの立場からの、「文章・談話」の研究も盛んになってきている。更には、国語（科）教育や日本語教育の立場からする「文章・談話」研究にも注目しておかなければならない。このように拡大した「文章・談話」の研究を網羅的に展望することは困難をきわめる。筆者の力量の上からも、やむなく、極立つ動向を、課題・観点別に取り立てて紹介するという方法で、この項の展望の責をふさがせていただく。

一、主な著書・論文集・雑誌特集号など

単著で注目したのは、①山口佳紀『古代日本文体史論考』（有精堂、93・4）。②阪倉篤義『日本語表現の流れ』（岩波書店、岩波セミナーブックス45、93・2）、③山梨正明『推論と照応』（くろしお出版、92・12）、④佐治圭三『外国人が間違いやすい日本語の表現や研究』（ひつじ書房、92・10）である。②④は、「表現」とあり、文を超える文法の領域にもわたるが、主としては、文形式を中心とする表現の問題であるから、ここでは指摘するにとどめる。①には、著者の「文体」観に注目すべきものがあり、文体こそが言語作品の本質を捉えるものであるとし、従来、微視的、部分的になりがちだった文体研究に対して、全体的に捉える方法の重要性を説く。今昔物語集の文体研究にはじまった著者の研究は、それぞれの文献・作品を形成する言語の源流を確かめる方向に研究を展開させており、今では、古事記の文体を究めることを目標とするに至ったと述べている。

③は従来、言語現象を、文法・論理・レトリックの三つの立場から別々に対象としてきたが、それらを統合的に見直そうとする著者

の考えを実践した一つで、推論の問題を文法との相互関係で捉えようとし、推論に関わるうち、特に「間接的な照応現象の問題」に焦点を当てた労作である。語用論・談話分析の今後の指針となろう。後にみる、⑮の「語用論」（山梨正明担当）にも、著者の「語用論」と「文法」との関係が論じられている。なお、⑤西田直敏『文章・文体・表現の研究』（和泉書院、92・1）小林良三『日本語の表現』（和泉書院、92・12）があった。

論文集では、⑥『文化言語学――その提言と建設』（三省堂、92・11）が注目される。「文化言語学」とは、林四郎の提言による。本稿では、そのうち「表現論的探求」「文章論的探求」などの章を中心に、注目すべき論文を以下で取り上げてみたい。さらに、研究雑誌の特集によって、この期の動向を見ておこう。『日本語学』では、⑦「文章と談話」（92・4）、⑧「視点論の現在」（92・8）、⑨「省略」（93・9）、⑩「話し合い」（93・4）などの特集があり、『表現研究』では、⑪「要約文の表現原理」（56、92・9）、⑫「説明の機能」（58、93・9）が、『國語と國文學』では、⑬「平安時代語研究」（69-11、92・11）に、「文章・談話」に関する論考が含まれており、『日本語教育』では、⑭「語用論」（79、93・3）など、それぞれ特集を組んでいる。これらの雑誌特集によって、現在「文章・文体」領域で、どんな課題がどんな観点から探究の的になっているかを伺い知ることができる。とりわけ次の雑誌特集が、今後の研究の方向を示唆する。

⑮「日本語の現在――現代語の何が問題か？」（『國文學』93・11、特集）中の「現代日本語論への新しい視点」に「文章・文体」領域のものとして、「指示語」（川端善明担当）、「接続」（森田良行担当）、「引用」（奥津敬一郎担当）、「語用論」（山梨正明担当）、「談話分析」（南不二男担当）、「文体・表現」（西田直敏担当）があり、短いながら、それぞれに新しい研究の方向を切り開いていて、この立項項目自体に、この領域における現代の課題が端的に物語られている。

二、文章・談話の研究

単位体「文章」を対象とする研究のうち、ここでは、主としてそのラング的側面を明らかにしようとする研究を取り上げる。課題・観点別に整理して示すことにする。

指示表現の研究　⑯田口尚幸「伊勢物語の地の文における対人物ソ／コ系指示語の使い分け」（『國語國文學報』51、93・3）、⑰馬場俊臣「指示語の文脈展開機能」（『日本語学』92・4）、⑱同「指示語――後方照応の類型について」（『表現研究』55、92・3）、⑲近藤泰弘「レ系指示詞の意味論的性格」（⑥所収）、⑳糸井通浩「公任「三船の才」（大鏡）再考――指示語の機能と語り――」（『説話論集』3、93・5）。⑯⑳などは、「語り」言説によって語りの「方法」を捉えようとしたもので、視点論とも深く関係する。「語り手」の認知のあり方を論じている。⑲は、「コレ」「ソレ」系の指示詞で指示するとモノ扱いになる一方で、なぜヒトを問題なく指す場合もあるのかを、「メンタルスペース理論を援用」することで、意味論的観点から説明を試みた論考。上に示した⑮所収の「指示語」（川端善明担当）は、これまでの「コ・ソ・ア・ド」体系の論をよく整理しながら新見を示しており、今後必ず触れねばならぬ論となっている。「指示」機能については、認知言語学などにおいてもますます盛んになるテーマと思われる。なお、馬場には「指示語系接続詞と指示詞――「そうして」「こうして」を例として」（『語学文学』31、93・3）がある。

接続表現の研究　文と文との連接に関する研究も盛んになってきた。㉑後藤英次「平安・鎌倉時代の記録体における並立の接続詞について――「オヨビ」と「ナラビニ」」（『国語学研究』32、92・3）、㉒佐久間まゆみ「接続表現の省略と用法」（『國文』77、92・8）、㉓趙慧欣「接続表現について――文章中で接続機能と修飾機能を果たす、いわゆる副詞等を中心に――」（『表現研究』55、92・3）、㉔多門靖容「文章の談話分析――「しかし」前後半の接続展開調査――」（『日本語学』92・4）、㉕有賀千佳子「対話における接続詞の機能について――「それで」の用法を手がかりに――」（『日本語教育』79、93・3）、㉖赤羽根義章「接続詞「でも」「それでも」「ところが」「それどころか」をめぐって」（『詞林』12、92・10）など。森田良行は、⑮所収の「接続」で、「接続研究は、結局は文や文章・談話の意味研究に帰する」と述べている。㉒は、「省略（表現）」の問題にも関わっており、接続表現についての研究領域を広げていて注目される。

要約に関する研究　近年目立つ研究課題の一つが、この「要約（文）」の研究である。この課題は従来から、国語（科）教育―特に、その読解指導上、要請するところであったが、近年、「日本語教育や英語教育等の外国語教育の課題としても重視されるようになり、また、機械抄録の開発や認知科学の分野から、要約規則に関する新たな検討が加えられつつある。」（㉙の佐久間まゆみの言）ここに浮上してきた研究課題である。この動向を象徴するのが、表現学会（平成四年度、於筑波大学）でのシンポジウム「要約文の表現原理」であった。『表現研究』（56、92・9）は、その特集（⑪）で、パネリスト・司会者の論文を掲載する。㉗田中章夫「文章の題名、要約文とキーワードの関連性」、㉘鳴島甫「要約文の表現原理についての一考察」、㉙佐久間まゆみ「要約文の表現原理――シンポジウムの司会をして」が、それである。他に、㉚高崎みどり「書きことばにおける伝達――引用と要約について――」（『國文』77、92・8）、㉛澤田深雪「学術論文の要旨の表現特性」（『表現研究』57、93・3）、㉜佐久間まゆみ「要約文の類型分類」（⑥所収）、㉝土部弘「論説・評論の主題と要旨」（『国語表現研究』6、93・3）、㉞石井正彦「臨時一語と文章の凝縮」（『國語學』173、93・6）などがみられた。㉞は、「凝縮的な文章」と、要約化、くりこみ、臨時一語との関係を論じている。近年の、この動向の先導者は、佐久間まゆみの論考である。その点、㉙が参考になる。

反復、くりかえし、応答など「会話」の研究　もう一つ、近年の目覚しい研究は、「話しことば」のそれである（待望久しい、三尾砂著『話しことばの文法』の復刊も予定されている）。なかでも、「会話」に関するものが目立つ。言語活動―言語生活の領域と重なるかも知れぬが、ここで主な論文を確かめておきたい。『日本語学』の特集（⑩）もあったが、他に、㉟中田智子「会話の方策としてのくり返し」（『国研・研究報告集』13、92・3）、㊱尾崎明人「接触場面の訂正ストラテジー――「聞き返し」の発話交換をめぐって――」（『日本語教育』81、93・11）、㊲藤原真理「対話における相づち表現の考察「そうですか」「そうですね」等を中心に」（『東北大学文学部日本語学科論集』3、93・9）、㊳野村美穂子「断りの表現――コミュニケーションと含意」（『言語学論叢』10・11、92・10）、㊴今石幸子「電話の会話のストラテジー」（『日本語学』11・9）、㊵内田伸子「会話行動に見られる性差」（『日本語学』93・5特集「女性語」所収）、㊶重光由加「会話のパターン」（同上）、㊷森山卓郎「否定の応答付加表現をめぐって」（『日本語教育』81、93・11）など、特に日本語教育からの要請の強い研究課題とみられる。なお、野村真木夫「日

常的な会話における話題の転換と割り込みの機能」（『弘学大語文』18-19、93・3）がある。

その他の「話しことば」の研究を拾ってみると、㊸茂呂雄二・小高京子「日本語談話研究の現状と展望」（『国研・研究報告集』14、93・3）の「談話」は、話しことばの意味で、この分野の研究動向を知る上で参考になる。この期の論文には、㊹湯通堂誠「命令・依頼の表現」（『日本語・日本文化研究』2、92・11）、㊺川成善香「依頼表現」（『日本語学』、特集「女性語」所収）、㊻氏家洋子「日本語表現と性差別――私的話しことばにおける性差形成の検討を通して」（『日本文学』41-11、92・11）、㊼熊取谷哲夫・村上恵「表現類型に見る日本語の『助言』の伝達方略」（『表現研究』55、92・3）、㊽鈴木睦「女性語の本質――丁寧さ・発話行為の視点から――」（『日本語学』、特集「女性語」所収）などがあった。

その他――文章論・語用論など　文章論関係では、⑦の『日本語学』特集の掲載論文の外に、㊾水戸光子「文の機能に基づく新聞投書の文章講成」（『表現研究』55、92・3）があり、㊿林四郎「語の意味づきと意味づけ、その循環」（『国語学』175、93・12）は、語の意味を、語、文、文章それぞれの段階での違いで捉えようとしたもの。『表現研究』の特集⑫「説明の機能」が注目される。これは、表現学会（島根女短大）でのシンポジウムの記録であり、小田迪夫、野村真木夫、土部弘（司会）が、それぞれの立場から、テーマに沿った提言をしている。「描写」に対立する「説明」の言語を、所謂「説明文」の意味で捉えるのでなく、あらゆるジャンルの文章中に見られるものとして捉えようとしたもので、日本の物語論における「草子地」の問題も、この領域に入ってくるものと考えられる。文章論の新しい展開を示している。なお、(51)中村吉秀「描写度と文体」（『表現研究』56、93・9）があり、中村の一連の研究の一つである。語用論関係では、(52)『日本語教育』（79、93・3）が「語用論」を特集しており、その他、(53)斎藤令子「心情述語の語用論的分析――使い分け現象の記述を中心として――」（『日本語学』11-7、92・6）、(54)田窪行則「談話管理の標識」（⑥所収）、(55)宮崎和人「「～ダロウ」の談話機能について」（『国語学』175、93・12）などがみられた。先に見た山梨正明の論が注目されるところである。

三、文体・表現の研究

ここでは、単位体「文章」の、主としてパロール的側面の研究を主として取り上げることになる。

語りの言説　近年、特に文学の側における「語り」の言説（ディスクール）の研究が盛んであるが、(56)涌井隆「近世の文章語と語り」（『日本文学』93・10）、(57)「『好色五人女』における「語り」の位相――西鶴の視点距離を中心に――」（『国語国文学誌』93・12）など、近世の作品にも及んで来ている。近代の作品についても、(58)河野智子「移行する「今」と語り手の関係――谷崎潤一郎「痴人の愛」をテキストとして」（『表現研究』56、93・9）、(59)江藤茂博「芥川竜之介『羅生門』論――「語り手」の優位性と重層的テキスト空間――」（『日本文学』94・1）などがあった。中でも「語り」の言説における「視点」論が盛んであり、(60)丹羽哲也「過去形と叙述の視点」（『國語國文』61-9、92・9）、(61)糸井通浩「小説冒頭表現と視点――「は／が」の語用論的考察」⑥所収）、(62)同「視点と語り」（『表現学論考』3所収、92・12）があり、(57)や(58)(59)の「語り手」を捉えたものも、広い意味ではまた、「語り」における視点の問題に還元しうるものである。

視点に対する関心は、「語り」の言説論にとどまらず、様々な研究

領域においてみられる。そういう視点論の広がりは、『日本語学』の特集「視点論の現在」（⑧）にみることができる。十本の論文を掲載する。なお、松木正恵「文末表現と視点」（早大『日本語研究教育センター紀要』5、93・3）がある。

また、㊸塚原鉄雄「芥川竜之介の羅生門」（『二松』6、92・3）は、文末のタ形文・非タ形文の区別によって作品構成を考えたものであるが、先の㊵や㊹野田尚史「テンスから見た日本語の文体」⑥所収）、㊺松本邦夫「枕草子の『回想』――〈はなし〉と〈かたり〉の位相――」（『古代文学研究』第二次2号、93・10）、㊶同「枕草子、日記的章段の固有名と「き」」（『国語年誌』、93・12）、㊼野村真木夫「時間の表現のテクスト的機能」（『表現研究』56、93・9）なども、「語り」言説の研究であり、また、「視点」とも深く関わった研究的観点である。

古典文体の史的研究　対象とすべき作品・文献が多岐にわたるため、この面の研究もなお盛んで論文も多い。中で、㊽沖森卓也「文体の史的研究に関する覚書」（『国語と國文學』69-11、92・11）、㊾小林千草「文章研究の歴史と現在――通過点としての中世――」（『日本語学』92・4）が、文章・文体研究の課題を整理し、また新しい方向を示してもいる。なお、沖森には、「風土記の文体について」（『小林芳規博士退官記念国語学論集』、92-3所収）がある。以下目についた論考を列挙しておく。

㊿宇都宮睦男「『三宝絵』の表現――前田家本の場合」（『解釈』39-1、93・1）、(71)山本真吾「平安時代中後期追善願文の文章構成」（『三重大学日本語学文学』4、92・3）、(72)渡辺仁作「枕草子類纂ものの文体と意義」（『解釈』39-1、93・1）、(73)糸井通浩「枕草子の語法一つ――連体接『なり』の場合」（『國語と國文学』、69-11、92・11）、(74)西田隆政「源語須磨の表現構成――助動詞「ぬ」による段落構成――」（『中古文学』51、93・5）、(75)根来司「謙譲語から見た源氏物語の文章」（『国語と國文学』69-11、92・11）、(76)竹内美智子「源氏物語の文章――平安朝文章史記述の為の一つの試み――」（同上）、(77)倉田実「源氏物語の頭中将と「……人」表現」（『大妻国文』24、93・3）、(78)藤井俊博「今昔物語集の文体と法華験記――「更ニ無シ」をめぐって」（『國語學』173、93・6）、(79)谷光忠彦「今昔物語集の「あり」と「ゐる」」⑥所収）、(80)福田益和『愚管抄』の文章と語法管見」（『訓点語と訓点資料』88、92・3）池上誠司「宇治拾遺物語の表現機構――「あさまし」を中心として――」（『日本文芸研究』44）小林健二「「山鹿物語」の語り物的性格――文体の考察を通して――」（『大谷女子大国文』22）久保田篤「『東海道名所記』の文章の特色」（茨城大『人文学部論集』25）などがあり、(81)森野宗明「待遇表現の諸相――平安時代の文学作品にみられる夫婦の口舌の描写を中心に――」（『表現研究』56、92・9）が、待遇表現としての語彙選択にみられる、表現意図を鋭く読みとっており、ことばに即して表現を生き生きとよみがえらせる文体研究のあり方として示唆深い論考である。

文章体の研究　パロール的側面の文体研究のうちでも、より類型（ジャンル別）的文体的特徴を捉えようとするものを、文章体の研究としてここにまとめてみたいが、個々の論文の対象が、截然と「文体」と「文章体」に区分できるものでもないところがある。

(82)近藤泰弘「仁明天皇四十宝算賀興福寺大法師等長歌について」（『訓点語と訓点資料』88、92・3）は、敬語などに注目して、この長歌が、奈良時代語と平安時代語という二つの性格を持っていると指摘した論文で、①の山口著書における研究と併せ考えてみなければならない問題提起である。(83)糸井通浩「かな散文と和歌表現――発想・表

現の位相――」（『和歌と物語』和歌文学論集3所収、92・9）は、散文と韻文（和歌）との表現上の類型的な違いを、文末形式の〈ならむ〉と〈なるらむ〉との違いや、用いられた形容詞の違いという語彙的側面、さらには、複合名詞や連句の使用上の違いなどに注目して、散文と韻文の発想上の違いがどのように表現上の違いに反映しているかを追求する。㊽峰岸明「『本朝文粋』の文章について――日本漢文文体制定の基準を求めて――」（『國語と國文學』69-11、92・11）、㊾西村浜子「平安時代の解文に見られる裁許要請文言の類型について」（『表現研究』57、93・3）、㊿月本雅幸「院政期の訓点資料における助動詞」（『國語と國文學』69-11、92・11）、(87)田中瑩一「口承文芸の表現研究――民話と田植歌を手がかりに――」（『表現研究』58、93・9）、(88)佐竹秀雄「昭和軽薄体と新言文一致体」（『武庫川女大言語文化研究年報』4、92・3）などがあり、(89)柳田征司「「修行者あひたり」型表現の来由」（⑥所収）は、従来の説に疑問を呈し、言語事象には、「できるならば、ありふれた説明を加えたい」という考えに立って、「出会いが無意志的なものであったことを表わす」表現という解釈を展開、柳田の構想する国語史の一つに組み込まれる論考である。

その他　修辞・レトリックに関するものでは、(90)半沢幹一「古代和歌の火喩（ママ）」（『表現研究』57、93・3）、(91)大嶋真紀「川端康成『雪国』の比喩表現」（同上）、(92)橋本敬司「芭蕉の「風」を巡って――風のイメージ――」（同上）などが目についた。

近年目立ってきたことに、比較、対照研究において、「語」「文」を超えて、「文章（パロール）」（表現）を対象とする研究が見られるようになったことがある。これも、日本語教育が充実してきて、日本語の研究者の層が広がってきたことに大きな理由を認めることができる。(93)石綿敏雄「抽象的表現と具体的表現――日欧表現比較――」（⑥所収）、(94)張麟声「中日所在表現の対照研究」（⑥所収）、(95)仁木久恵「日英語表現の比較――「貸す」と「借りる」をめぐって――」（⑥所収）、(96)佐々木倫子「わかりきった質問に答える時――日英対照、応答疑問文」（⑥所収）、(97)大原由美子「「女ことば」のピッチ――日英語の比較」（『日本語学』、特集「女性語」所収）、(98)稗島一郎「広告キャッチフレーズと日英語表現の比較」（『表現研究』55、92・3）などがみられた。

なお、以上では取り上げなかったもので、次の論稿があった。

(98)牧恵子「「題名」のもつ表現性――絵本の場合」（『あいの会国語試論』6、92・3）、(100)中村吉秀「描写度指数を用いた文章分析」（『国語と教育』17、92・3）、(101)長田久男「文章における文の意義の配列と連関」（『岐阜女子大学紀要』21、92・2）、(102)神尾暢子「王朝「塗籠」の表現機能」（『国語表現研究』5、92・3）、(103)伊土耕平「論説文の意味構造」（『奈良大学紀要』20、92・11）、(104)井倉美江「表現姿勢からとらえた叙述の様相――描写の位置づけをめざして――」（『学大国文』35、92・2）、(105)阿久澤忠「源氏物語、宇治十帖の表現技法――「昔の人」の用語をめぐって――」（『文体論研究』38、92・3）。

また、(106)中村明「「文体」概要の変遷」（『日本語史の諸問題』辻村敏樹教授古稀記念、92・3）があった。ただし、ここでは作家・作品の文体研究については、本稿では特に取り上げなかった。

なお、解釈学会の表現学大系は、ひきつづき刊行中であり、この期には、『表現指導の原理と方法二』（各論篇30、92・3）と『表現学と諸科学』（総論篇2、93・3）とが出た。

おわりに

筆者（本稿担当者）の関心のあるところには厚く、ないところは薄くなっているに違いない。その上、力量のことや身辺事情のことも重なって、遺漏の、注目すべき論考もあるかと思われる。また、ほとんどコメントする余裕がなく、論稿の列挙に終わったことも合わせて、大方の御寛怒を乞いたい。課題・観点別に整理してみたが、必ずしも納得していただけない部分もあろう。一つの論文が、いくつかの顔（観点）を持っていることもある。しかし、以上、この領域に関して、読者が展望していただく上で、なんらかの目安（助け）になれば幸いである。

――龍谷大学文学部教授――